

《翻 訳》

17世紀初め日本人信徒がモーセの第六誡に関して行なった
告解をめぐって

——ベイラ・インテリオール大学の学術誌 *A Beira* へ寄稿したエッセイ——

Em torno das confissões dos nipónicos nos inícios do século XVII
relativamente ao sexto mandamento de Moisés: um ensaio
apresentado na revista *A Beira* (Departamento de Letras, Universidade da
Beira Interior)

日 埜 博 司

HINO Hiroshi (Universidade Ryūtsū Keizai, Ibaraki/Chiba, Japão)

流通経済大学は、毎年、「松戸市民公開講座」を、松戸市教育委員会(生涯学習推進課)と共催している。2017 年秋季講座は、流通情報学部を担当となり、公開講座委員である日埜のコーディネーションで進めてよろしい、とのことであった。そこでまず、日埜自身が、「響き合う歴史と宗教」という統一テーマを設定、本学教員のうちに人材を求め、関哲行(中・近世イスパニア史)と高橋巖根(イスラム学)の2氏に参加を呼びかけたところ、喜んで応ずるとの返答を得た。

講話の内容であるが、10月の各土曜日、計4回にわたり、脚注¹に示す論題で行なわれる。それぞれの終了後には、知の醍醐味というべき、活発な質疑応答が交わされるであろう。心から楽しみにしている。

2016 年夏、イスパニア生まれのドミニコ会士ディエゴ・コリャードの編著『懺悔録』(ローマ、

¹ 第1回: 日埜博司「キリシタン時代の日本人とモーセの十誡——“八百万の神”を奉ずる民が一神教を受け容れるとき」

第2回: 高橋巖根「イスラムと地政学——歴史から見た中央アジアと中東の違い」

第3回: 関哲行「迫害と追放の果てに——中近世スペインの宗教的マイノリティ」

第4回: 日埜博司「キリシタン時代の日本人とモーセの十誡——カトリックの性倫理を受容した信徒はどう振舞ったか」

1632 年刊)に関するいささか大部な書『コリヤード 懺悔録——キリシタン時代、日本人信徒の肉声』を、神田小川町の書肆八木書店より刊行した(精興社の美しい活字で印刷されたこと、さらには、南蛮文化館蔵の重要文化財、伝狩野派『南蛮人渡来図屏風』を、カバーのデザインに用いることができたこと、も密かな喜びである)。「モーセの十誡」および「七大罪」に背く行動を犯した日本人信徒の、日本語による懺悔(カトリック用語で正しくは告解)を深く読み込み、それらすべてをポルトガル語へ直す、という作業の過程で、無名の日本人信徒が確実に懷いたであろう苦悩と葛藤を、文字どおりナマの資料を通じて、追体験することができた。

拙作の刊行からさほど時を隔てず、『懺悔録』の興趣に満ちた内容の、その一端を、知的好奇心溢れる松戸市民へ開陳するチャンスが与えられたことに、静かな高揚を感じずにはおれない。

第 1 回で主に扱うモーセの第一誡は、「御一体のデウスを、拝み尊び奉れ」というものだ。

ひとたびキリシタンへ改宗した信徒は、従前泥んできた、もろもろの異教的迷信の信奉から遠ざかることを、求められる。たとえ強制されてであっても、神社仏閣を参詣したり尊崇したりすることは、誡めの対象となる。世俗の主君に随従して行なうことを余儀なくされた偶像礼拝やら異教的儀式やらと、心ならずも向き合ってしまったとき、キリシタンの家来は、どう振舞うべきか、いかなる態度をとるべきか、などの厄介な問題について、16 世紀末から 17 世紀初め、在欧の権威ある神学者を巻き込んだ議論が行なわれ、イエズス会内部、また、イエズス会と托鉢修道会との間で神学的な——そしていささか党派的色彩も帯びた——論争が戦わされた。

永年、汎神論的な宗教的風土に浸ってきた日本人一般。彼らが、カトリックという——少なくとも建前のうえでは——厳格な一神教の新奇なる教理を受容するよう命ぜられ、それに附随する道德コードが、みずからの父祖から受け継いできた倫理内容とはあまりにも異なることに、驚き、戸惑う。そして結局、“異教”のムラ社会を特徴づけるであろう、抗しがたい“同調圧力”を受け、第一誡に違背するもろもろの行為を犯す。

それらが、告解文という形式で、ラテン文字で記された日本語でもって、後世の私どもへ生き生きと伝えられる。同じ手続きは、第二誡、第三誡……と繰り返され、さらに、驕慢、貪食(トンジキと訓ずる)、嫉妬……と、「七大罪」に関する告解へと続く。締めくくりは、以上の告解に対し、コンヘソル(聴罪司祭)が信徒へ与える訓誡の言葉。

まことに好いタイミングというべきか、拙作づくりを文字どおり助けてくれたアナ・リタ・カリ

ーリョ先生(Professora Ana Rita Carrilho)が、昨年、年一度刊行の学術誌『ア・ベイラ』(*A Beira*)の実質的な編集長の任に就かれた。同誌は、本学の学術文化交流協定校、ポルトガル共和国コヴィリヤン市のベイラ・インテリオール大学(Universidade da Beira Interior, Covilhã、略称 UBI) 藝術文藝学部文藝学科(Departamento de Letras, Faculdade de Artes e Letras)の学術誌である。執筆者は広く国の内外へ求められ、査読および採否は編集委員会に一任される。このたび表紙裏に記された同誌の編集方針が改めて確認できたので、脚注に載録しておく²。

以下に掲げる拙稿は、『ア・ベイラ』通巻 11 号(2017 年 4 月刊)に収載するよう、リタ先生から^{しょうよう}懇懇をいただいて執筆したもの(したがって、掲載がほぼ約束されたうえ、ありがたいことに、いつものことながら、十分な校閲・訂正を、リタ先生に加えてもらう恩恵に浴した)。モーセの第六誡(「邪淫を犯すべからず」)をめぐるもろもろの告解をポルトガル語の拙訳を通じて紹介するのみならず、それらをさらなる興味をもって読んでもらうため記述した、ポルトガル語による解題である(このテーマが、公開講座第 4 回で取り上げられるであろう)。

『懺悔録』に見える第六誡に関する告解は、告解をせねばならぬ状況に陥った事情の説明を含め、15 例である。収録された告解が男女いずれによって為されたかは、言葉遣いによってではなく、もっぱら文脈なり告解の内容なりによって、容易に識別可能だ。で、告解例の男女比率を調べてみると、男のそれは 7、女のそれが 6。ほぼ半々である。残りの 2 例は、①獣姦を懺悔するもの、と、②色事の仲介を告白するもの。この 2 例は、男女いずれの告解であるか、にわかに断言はできない。

赤裸々に告白される性的“罪科”のかずかず——。それを一瞥するだけでも、カトリックが命ずる性道徳を遵守しうるか否かは、信徒になった後ですら、男女を問わず、日本人にとり、大いなる難儀さを伴う、厄介な悩みの種であり続けたことが、判然とする。

² A revista *A Beira*, a publicar pelo Departamento de Letras da Universidade da Beira Interior com periodicidade anual, tem como objetivo dar a conhecer os diferentes temas abordados em conferências, seminários, palestras ou aulas abertas organizados pelo departamento. Pretende-se, igualmente, divulgar trabalhos de investigação ou de reflexão, dedicados às áreas transversais do departamento.

ベイラ・インテリオール大学文藝学科によって年一度刊行される本誌『ア・ベイラ』は、当学科の組織した講演会、ゼミナール、公開の講座もしくは授業においていかなる論題が扱われたかを広く公知することをもって、その目的とする。当学科が、縦断的にカヴァーするもろもろのエリアへの真摯な取り組みとしての研究もしくは考察の成果を公開し世に問うことも、本誌の企図するところである。

江戸中期以降に現われた川柳の一変種に「バレ句」と呼ばれるものがある。形式は俳句・川柳と同じであるが、内容は、いわば“キワモノ”限定である。たとえば、男女の性的振舞いをめぐるさまざまな不細工やしくじりや機微、不貞女房のしたたかさ、寝取られ亭主のふがいなさ、を可笑しがる作品が、特におもしろく、ときに切ない。

性差別の問題にはことさら敏感にならざるを得ぬ時節柄、まことにもって罰当たりな企てとは思いつつも、モーセの第六誡を犯した信徒の——特に女性信徒の——心情をよくぞ射抜いた、と思われるバレ句を幾例か収集、拙作の中で説明的なポルトガル語訳を加えてみた(一言しておけば、バレ句なる文藝ジャンルは、性差別の意識からはおよそ遠いものである。フェミニストと呼ばれる人々が無思慮にいきり立ちそうな際どい話柄が確かに扱われてはいる。が、ニンゲンという生き物が日々やらかす滑稽な振舞いへのからかいなりイジメに関し、それが女性のみを標的にして行なわれているわけでは、全然ない。それどころか、喰い飛ばしの対象は、当然ながら、男であるケースのほうが、遥かに多い。つまり、お互いさま、である。そして何より、おのれのブザマをおのれで喰い飛ばしてみせるという明るさ、大らかさ、余裕ある心のありようが、この文藝ジャンルのすばらしさ、と筆者には思われた)。本エッセイではその幾つかが引用されるであろう。

日本民俗誌を語るうえで到底看過することのできぬ「夜這い」の習俗。これについては、『懺悔録』にその行為そのものへの言及が見える。『日葡辞書』(1603 年、長崎刊。同補遺、04 年刊)における「夜這い」の語釈には、やや不満足なものがあるように思われたため、この習俗が永く保たれてきた要因なり背景に関し、やや詳しい記述を本稿においてポルトガル語で行なうことにした。

毎年 2 月の第 1 日曜日、奈良県明日香村の飛鳥坐神社^{あすかにいますじんじや}で、「おんだ祭り」と呼ばれる奇祭が斎行される。御田植儀礼の、その古来の姿をより忠実に今へ伝える祭礼、と評してよいのであろう。「五穀豊穰」とそれを可能ならしめる「子孫繁栄」を願う、その“予祝”儀礼として、仮面をつけた擬似夫婦(男のみが演ずる)が、性行為を強く連想させるジェスチュアをふんだんに盛り込んだパフォーマンスをユーモラスに演じ、現実には子宝を授かりたい夫婦を含む見物客が押し寄せて、やんやの喝采を送る。

『懺悔録』にそうした習俗への言及があるわけでは、ない。が、性の営みを農事の繁栄に絡めて神聖視する文化と、肉の営みを基本的には罪深いものとし、せいぜい種の保存と子孫繁栄のための必要悪としか見なさぬカトリックの性倫理の、その両者間に横たわる、「水と油」のような懸絶^{けんぜつ}を理解するため、「おんだ祭り」は格好のケーススタディたりうるであろうと思う。最終章「まとめに代えて」のくぐりで、古来の御田植儀礼の一面を描いたと思わ

17世紀初め日本人信徒がモーセの第六誡に関して行なった告解をめぐって

れる西川祐信(1671～1750)の作品を掲げた。祐信の影響を受けたとされる鈴木春信(1725?～70)は、祐信に対するオマージュとして、この絵を模写、そのうえで、これに傑作な“吹き出し”を加えたものをみずからの作品集に収めている。

カトリック宣教師が信徒へ課した誡めのうちでも、とりわけ第六誡は、受洗後の日本人男女にとり、誠実な遵守がきわめて困難なそれであったのであろう——。そのような評言をもつて、本稿を^{かくひつ}擱筆した。

*

ポルトガル語で記述されてはいても、おおよその内容は充分類推してもらえそうなエッセイであるので、章立てのみ、以下、解説的にやや改変し日本語で記しておく。

- 1 「^{やおよろず}八百万の神」を奉ずる民は、モーセの十誡にどう^{あいたい}相對したか
- 2 「メカケ(テカケ)」——蓄妾の“罪”
- 3 「ナンシヨク」——「悪い、口にするのも^{はばか}憚られる罪」(『日葡辞書』)
- 4 生殖の意図を伴なわぬ淫欲
- 5 妄念による姦淫——両性の犯すもの
- 6 自慰行為——特に女性の犯すもの
- 7 「ヨバイ」とは何か
- 8 徳川“儒教体制”のもと、日本の婦人は貞潔であったか
- 9 避妊法あれこれ——墮胎・中絶・間引きの“罪”
- 10 「日本の婦人は処女の純潔にまったく顧慮を払わない」(ルイス・フロイス『日欧文化比較論』)
- 11 まとめに代えて——性倫理をめぐる彼我の懸絶



ベイラ・インテリオール大学文藝学科の学術誌『ア・ベイラ』通巻 11 号表紙

Capa da Revista *À Beira*, número 11 (Abril de 2017)

Em torno das confissões dos nipónicos nos inícios do século XVII relativamente
ao sexto mandamento de Moisés

HINO Hiroshi (Universidade Ryūtsū Keizai,
Ibaraki/Chiba, Japão)

1 Um as confissões dos nipónicos seiscentistas e uns costumes sexuais arraigados
no solo nipónico

O padre castelhano frei Diego Collado (Collado) – que nasceu em Miajadas na província de Cáceres, Espanha, por volta de 1589, ingressou na Ordem dos Predicadores no Convento de San Esteban, Salamanca, a 28 de Julho de 1604, e faleceu ao largo da Ilha de Luzon (Lução) do Arquipélago Filipino devido a um naufrágio ocorrido em Agosto de 1641 – é um dos missionários dominicanos que mais se dedicou às actividades evangelizadoras em Nagasaqui e seus arredores nos anos 20 do século XVII. Sob a severa perseguição anti-cristã já iniciada desde os inícios do século XVII pelo xogunato de Tocugaua (Tokugawa Bakufu), o nosso frade

fez incansáveis esforços para confessar os crentes japoneses e registou essas confissões em idioma japonês por meio das letras latinas cujo método de pronunciar é evidentemente português (não castelhano), letras essas que se revestem, com a ajuda de alguns sinais específicos inventados principalmente pelos jesuítas residentes no Japão, de mérito e várias conveniências de forma a representar bem fielmente os fonemas da língua nipónica no final do século XVI e no início do século XVII.

Publicada a obra *Modus Confitendi et Examinandi* (.....) ou *Niffon no Cotobani yô Confesion* (.....) pela Propaganda Fide, Roma, no ano de 1632, juntamente com uma gramática da língua japonesa (*Ars Grammaticæ Japonicæ Lingueæ*) e um dicionário latim-castelhano-japonês (*Dictionarium sive Thesauri Lingue Japonicæ*), ambos compilados pelo mesmo autor, o nosso dominicano pretendia, segundo parece, fazer destas últimas obras um instrumento útil para uma explicação morfo-sintáctica da linguagem utilizada na obra *Modus Confitendi et Examinandi*, desejando destacar vantagens da aprendizagem antecipada do idioma japonês aos seus colegas ainda anciosos pela continuação das actividades evangelizadoras em terras nipónicas. Esta publicação constituiria, no nosso entender, uma prova de que o referido frade, pelo menos na sua óptica subjectiva, mantinha ainda a esperança de continuar a empresa em questão.

Os missionários católicos que se dedicaram, desde os inícios do século XVI, à missão e evangelização tanto na África, Ásia – na qual se incluem o Subcontinente Indiano, a China, o Japão, etc. – como em tantas outras partes das Américas Espanhola e Portuguesa, fizeram esforços não só para publicar *CATHECISMOS* ou *DOCTRINAS* destinados aos crentes nativos e escritos nos respectivos idiomas indígenas, mas também para compilar *CONFESSIOARIUM*, o qual poder-se-ia designar como “manual” a ser utilizado pelos confessores de maneira a induzirem os crentes nativos a fazerem confissões de modo correcto e eficaz.

Em comparação com a universalidade dos livros pertencentes aos sobreditos géneros, afigura-se-nos relevante o valor de raridade da obra *Modus Confitendi et Examinandi*. As confissões dos crentes nativos, neste caso, japoneses, cuja divulgação foi (e ainda é, claro) rigorosamente proibida, são registadas ali de modo fiel e textual. O nosso dominicano, segundo parece, inventou um pretexto engenhoso de forma a que os missionários vindos daí em diante ao País do Sol Nascente encontrassem, nas sobreditas confissões, variados exemplos bons e

úteis para a aprendizagem prática de um idioma japonês bastante coloquial. De qualquer modo, julgamos seguramente que a natureza da obra aqui apresentada é espantosa e até excepcional, por não conhecermos nenhum outro livro semelhante, se bem que não tenhamos coragem de afirmar ser absolutamente a única deste género.



描かれた告解。和室の青畳の上で侍(?)が黒衣のイエズス会士に告解を行なう。筆者の知る限り、優れてカトリック的なこの所作が南蛮美術に描かれた唯一の例。伝、狩野派『南蛮人渡来図屏風』(16世紀末か17世紀初。大阪、南蛮文化館蔵、重要文化財)より

Um samurai (?) fazendo a confissão sobre um tatami azul junto de um padre jesuíta. Trata-se, segundo cremos, do único exemplo no qual se desenha o presente acto católico por excelência na arte Nanban, mais concretamente, nos Biombos Nanban. Atribuídos à escola Kanō. Fins do século XVI ou nos inícios do século XVII. Museu Nanban Bunkakan, Ōsaka.

Quando publicámos a (uma) tradução integral portuguesa da sobredita obra (Tóquio, Yagi [Yaghi] Shoten, 2016, xii, 714 ps) acompanhada do fac-símile da primeira edição conservada na Biblioteca de Tenri, Universidade de Tenri, Nara, redigimos, de acordo com a nossa

curiosidade particular, várias observações e anotações, em especial, relativas aos «atritos» morais e psicológicos concebidos pelos crentes de ambos os sexos, quer antigos, quer recém-convertidos, perante a nova fê e a ética católica.

No que diz respeito ao primeiro mandamento (“Não haverá para ti outros deuses na minha presença”), esses «atritos» não foram sentidos nem experimentados pelos seus antepassados de nenhuma maneira, pois, o povo japonês, por longo espaço de tempo, não conhecera a única divindade onipotente sob um clima religiosamente “ambíguo” e “brando”, clima esse que fora criado mediante a convivência com “oitocentos miríades de divindades” – de acordo com um dito comum nipónico –, na qual se mesclavam as xintoístas, budistas, animísticas, talvez até cristãs (!) actualmente, entre tantas outras.

Aqueles «atritos», no que se concerne ao sexto mandamento (“Não cometerás adultério”), deviam ficar, segundo cremos, mais sérios e severos, como é presumível através de uma olhada pelas 15 confissões relativas ao referido mandamento. Alguns leitores cristãos escandalizar-se-iam ao saberem dos actos dos nipónicos já convertidos, por vezes de índole infame, contrariando a ética sexual católica, tais como o adultério, o concubinato, o «Yobai» – a ser adiante explicado –, a sodomia, o onanismo, a desfloração, o aborto, o infanticídio, entre tantos outros. Contudo, na qualidade de estudioso, não poderíamos deixar de afirmar que existiam em vigor, no mesmo Japão “evangelizado”, alguns peculiares códigos morais e sociais, códigos esses, pelo menos nalguns casos, que podiam justificar aquelas condutas consideradas pecaminosas na visão dos valores católicos.

No presente ensaio procurámos esclarecer desvairados «atritos» concebidos pelos crentes japoneses, mais concretamente acerca do sexto mandamento de Moisés. Para além disso, decidimos, aquando da tentativa de observar e anotar as respectivas confissões, utilizar um género de cantiga chamada «Senryū» [川柳] («Xenriū»), cantiga essa que foi criada nos meados do período Yedo (1603-1868). A «Senryū», no que diz respeito à forma, é igual à «Haicu» [俳句] («Faicu»), ambos sendo de 17 sílabas dispostas respectivamente em três linhas na métrica de 5-7-5, mas a «Senryū» é mais realista e descarada do que a «Haicu» no que se concerne à descrição das condutas diárias do ser humano. Trata-se de um género literário bastante vulgar e não tão requintado, mas por isso mesmo, se nos torna possível conhecer melhor, segundo cremos, uma realidade mental sem reboços nem maquiagem do povo japonês em geral.

Afigura-se-nos, em todo o caso, bem surpreendente podermos encontrar vários crenes de ambos os sexos que não podiam fugir aos costumes “pecaminosos” herdados de tempos antigos numa atmosfera “gentia” vivida e conservada sem quase nenhuns tabus relevantes relativamente à moral sexual.

Entremos, então, na análise das confissões dos nipónicos e nipónicas seiscentistas de forma concreta e assaz minuciosa, sempre considerando e dando ênfase aos «atritos» e «desencontros» por eles enfrentados.

2 A «Mecaqe», ou seja, a Mancebia

O padre Luís Fróis informa-nos que Toyotomi Fideyoxi [豊臣秀吉], o qual, já quase senhor universal da Tenca [天下] – todo o Japão – tinha numerosas mancebas, mas não podia deixar nenhuns descendentes qualificados, proferiu as seguintes palavras por ocasião da sua inesperada visita à igreja de Vôzaca [大坂] – que é actual Ōsaka [大阪] – na terça-feira da semana santa do ano de 1586: “Bem sei que são os Padres melhores que o Bonzo de Vozaca, que alli pouza da outra banda do rio, pois tendes diferente limpeza de vida e não uzais das imundicias de que elle e os outros bonzos uzão, e bem se conhece nisto a ventagem que lhe fazeis. A mim tudo me contenta do que diz esta ley e não sinto outra dificuldade, para me fazer christão, senão a prohibição que fazeis de não poder ter muitas mulheres, que se esta largasseis tam[bem] eu me faria”³.

Na língua japonesa existem várias palavras significando «manceba» ou «concubina». O concubinato servia para o homem manter a linhagem paternal para além da satisfação dos seus prazeres carnaís. Actualmente são utilizados os vocábulos, como termos historiográficos, «Seishitsu» [正室] e «Sokushitsu» [側室] para designar respectivamente «primeira mulher» e «manceba[s]», mas curiosamente estes, com a respectiva grafia à quinhentista de «Xeixitçu» e «Socuxitçu», não constam no *Vocabulário da Lingoa de Iapam*, obra monumental cultural-linguística publicada pela Companhia de Jesus no Japão em Nagasaqui nos anos de 1603-04⁴.

³ Luís Fróis, *Historia de Japam*, IV, ed. José Wicki, Biblioteca Nacional de Lisboa, 1983, p.214. 『フロイス 日本史 1 豊臣秀吉篇』松田毅一/川崎桃太訳, 中央公論社, 1977 年, 214 頁。

⁴ *Vocabulario da Lingoa de Iapam com a declaração em Portugues, feito por alguns padres, e irmãos da*

A conduta de ter concubinas apesar de ter contraído matrimónio de forma legítima com uma mulher constitui aquilo que viola evidentemente um dos dois princípios fundamentais acerca do matrimónio – a singularidade e a indissolubilidade – declarados no Concílio de Trento (1545-63). Escusado será dizer que, na obra *SALVATOR MVNDI* compilada pela Companhia de Jesus no Japão no ano de 1598, a qual constitui, por assim dizer, um manual prático de maneira a que os confessores conseguissem obter dos crentes japoneses as confissões de forma efectiva, vê-se a seguinte interrogação: “Tecaqueuo mochitariya” [妾を持ちたりや] (“Tiveste concubinas?”).

Na sociedade japonesa dos fins do período «Xencocu» [戦国] – «Tatacaino cuni» [戦ひの国]. *Reino de batalhas ou onde ha guerras. S (Vocabulario da Lingoa de Iapam, f.295v)* – até aos inícios do período Yedo, predominavam diversos conceitos de valores inteiramente opostos à moral católica, nomeadamente no que diz respeito ao matrimónio. Entre a camada dos samurais dava-se ênfase à necessidade (e até à obrigatoriedade) de concubinato, como um instrumento de procriação. Pretendia-se com este princípio socio-cultural adquirir o maior número possível de filhos, assegurando a continuidade da linhagem paternal. Os dáimios, sob o governo do xogunato, temiam a confiscação dos seus bens e feudos por extinção de herdeiros do sexo masculino. Eis aqui a razão porque surgiu a seguinte expressão japonesa: «Faraua carimono» [腹は借り物] (Hara wa karimono), a qual poder-se-á interpretar: “A barriga é aquilo que se pode (e deve) pedir emprestada”. Uma obra do «Senryū» de origem desconhecida, feita provavelmente nos meados do período Yedo, transmite-nos o mesmo conceito: “Daimiōno cariru dōguu fara bacari” [大名の借りる道具は腹ばかり] (Daimyō no kariru dōgu wa hara bakari). Tradução portuguesa: “O

Companhia de IESV. Com licença do Ordinario, e Superiores em Nangasaqui no Collegio de Iapam da Companhia de IESVS. Anno M.D.C.III. *Supplemento deste Vocabulario impresso no mesmo Collegio da Cõpanhia de IESV*. Com a sobredita licença, & approuação. Anno. 1604. Regista-se aí o termo bastante vulgar «Xenbara» [先腹], o qual poder-se-ia traduzir literalmente como «barriga preferencial», explica-se como «Primeira molher. Item, Entendese pollo mesmo filho da primeira molher. ¶ Areua xenbaragia [あれは先腹ぢや]. *Aquelle he filho da primeira molher*» (f.295). Por outro lado, podem-se verificar na obra do frei Diego Colhado os seguintes três vocábulos com o sentido de «manceba» ou «concubina»: «Mecaqe» [妾] (p.44, l.4); «Tecaqe» [妾] (p.36, l.3; p.44, l.15); «Chicazzuqi» [近付き] (p.36, l.2), mas quanto à terceira palavra «Chicazzuqi», a qual só se presume que teria tal significado através do contexto da confissão, ela define-se no *Vocabulario da Lingoa de Iapam* apenas como «Amigo, ou amiga. ¶ Chijn chicazzuqi [知音近付き]. *Amigos, & conhecidos*» (f.47). No *Vocabulario da Lingoa de Iapam* consta a palavra «Sobanhôbô» [側女房] que se declara como «Manceba» (f.223) para além das sobreditas três palavras com o quase mesmo sentido.

único utensílio que os dáimios pedem emprestado é a barriga das concubinas”.

O concubinato tornou-se num alvo de discussão polémica também na cristandade do País do Sol Nascente. O primeiro dáimio cristão Dom Bartolomeu Vômura Sumitada〔大村純忠〕 é sempre descrito como um cristão-modelo fervoroso e sincero nas fontes eclesiásticas de cariz “edificante”. Não nos podemos, porém, esquecer de um facto grave, facto esse que foi esclarecido através da pesquisa de algumas fontes geneológicas de então, de que Sumitada, mesmo após a sua conversão em 1563, continuava a sustentar várias concubinas mantidas desde antes do seu baptismo. O dáimio cristão chegou a ganhar, por fim, quatro filhos e sete filhas mediante o convívio não só com a esposa legítima mas também com aquelas concubinas⁵. Os missionários inicianos, segundo parece, abstiveram-se de criticar severamente o comportamento do dáimio convertido, provavelmente tendo em conta a importância dele como padrão eclesiástico e doador do precioso porto de Nagasaqui. Pode-se com verdade afirmar que se trata de um exemplo da política missionológica jesuítica, a qual poder-se-ia denominar como aquela de «um peso, duas medidas».

3 O «Nanxocu», ou seja, “*peccado mao, ou nefando*”

Uma escritura intitulada *Fagacure*〔葉隠〕compilada por volta do ano de 1716 que decreve várias obrigações e regras de conduta dos samurais apresenta-nos um episódio. Quando morreu o terceiro xogun Tocugaua Iyemitçu〔徳川家光〕(1604-51), um confidente dele chamado Fotta Masamori〔堀田正盛〕(1608-51), parceiro íntimo que vivia no ânimo do xogun através do «Nanxocu»⁶〔男色〕, ou seja, do «*peccado mao, ou nefando*» (*Vocabulário da Língua de Iapam*, f.177v), decidiu suicidar-se perante a morte do seu senhor, cortando a sua barriga. Quando Masamori se preparou para levar a cabo o suicídio “honrado”, recusou que fosse descoberta a sua pele aos circuntantes, dizendo: “Por ter servido ao xogun na qualidade do dito parceiro, gostaria de morrer sozinho, pois não posso aguentar mostrar a minha pele a nenhumas outras pessoas”⁷.

⁵ Cf. Kudamatsu Kazunori, *Ômura-shi: Kotonoumi no jitsugetsu*, Tóquio, Kokusho Kankōkai, 1989, pp. 65-67.

⁶ Para saber melhor como foi o ofício cumprido por Masamori, veja-se também o verbete «Nhadō»〔若道〕, no qual se explica: “Vacaxuno michi〔若衆の道〕. *Sodomia, ou peccado mao*. ¶ Nhadōuo tatçuru〔若道を立つる〕. *Ser paciente neste abuso, ou peccado mao, como por ofício* (*Vocabulário da Língua de Iapam*, f.181v).

⁷ Cf. *Hagakure*, II, ed. Watsuji Tetsurō & Furukawa Tetsufumi, Tóquio, Iwanami Bunko, 1941, p.190.

A título de curiosidade, encontra-se no *Vocabulario da Lingoa de Iapam* (f.76) a declaração de uma frase feita bem implícita: «Fadato fadauo auasuru» [肌と肌を合はする] – «*Ter ajuntamento o homem com molher. As vezes. Fadauo auasuru* [肌を合はする]: *se diz dos que se vnem, & estão amigos, mas não he muito vsado nem proprio*», na qual se emprega o substantivo «Fada» – idest. «Fadaye» – que quer dizer «*Superfície da carne, ou corpo humano*». Mesmo que o costume do «Nanxocu» seja considerado como pecaminoso a partir do ponto de vista católico, todavia sempre predominava em vigor um código moral, em especial entre a camada dos samurais, código esse que pudesse justificar e garantir o compromisso, mediante o presente acto, de estes combaterem juntos com valentia e se guardarem de forma mútua, quer até à morte, quer até à vitória, no campo de batalha, como ocorreu, de facto, por ocasião da morte violenta de Voda Nobunaga [織田信長], grande patrão dos jesuítas, juntamente com os seus privados no templo Fon'nôji [本能寺], Quioto, em 1582.

Mas nos meados do período Yedo, tendo sido já realizada uma sociedade relativamente quieta e segura, foi perdendo o presente costume do «Nanxocu» um antigo valor “ético”, tendo-se tornado num mero instrumento, segundo parece, de molde a que ambos os sexos conseguissem gozar melhor do apetite carnal⁸. Na obra *Modus Confitendi et Examinandi*, para além de uma confissão feita por uma confessada esclarecendo ter aconselhado – de uma forma positiva – um homem a copular através do vaso traseiro para que não aconteça a inconveniente gravidez, vê-se um trecho na primeira confissão – bem longa – acerca do sexto mandamento: “Mata sôbet xôtocu no michi iori de gozatta redomo; nisando va vxiro, vel, xiri cara votoxi mataxita” [「また惣別生得の道よりでござったれども、二、三度は後、(または) 臀から落としまらした」] (“Ainda que tenha tido relações sexuais de modo geralmente normal com minha esposa, todavia, por duas ou três vezes copulei com ela – para melhor traduzir, subjuguei-a – pelo vaso traseiro”).

Aqui nos cabe apresentar uma obra do «Senryū» elaborada no ano de 1781 e contida na colectânea intitulada *Xenriū feō mancu auase cachicu zuri* [『川柳評万句合勝句揃』] (*Senryū hyō manku awase kachiku zuri*), na qual se destaca de maneira auto-riduculizada um sentimento do marido sofrendo tal desgraça, a qual diz: “Yoxichōye yuqinato nhôbō casanu nari” [芳町へ行きなと女房貸さぬなり] (Yoshichō ye yukina to nyōbō kasanu nari). Tradução explicativa portuguesa: “A

⁸ Cf. Watanabe Shin'ichirō, *Edo Bareku Koi no Irohaoshi*, p.68.

esposa não oferece o seu vaso traseiro ao marido e diz-lhe, rejeitando, que se dirija ao bairro notório Yoshichō onde há numerosos prostitutas”.

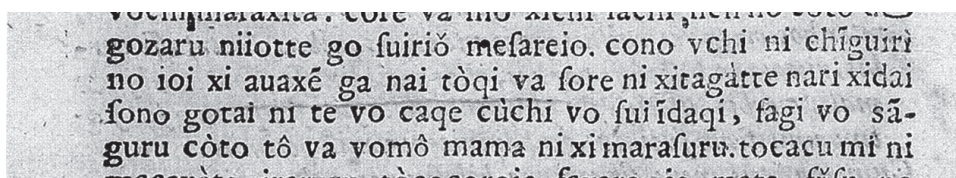
4 O apetite carnal ou deleite torpe sem nenhum objectivo de procriação

Abe Kin'ya [阿部 健也], famoso estudioso japonês especializado em História Medieval da Europa, apresenta-nos um interessante questionário elaborado por um ilustre investigador – no qual somos levados, na maioria dos casos, a chegar a uma conclusão negativa –, que nos faz crer que é excessivamente meticulosa a moral sexual imposta pela Igreja Católica medieval, comentando assim como é (ou foi) limitadíssima a ocasião para copular de uma forma “justa” e “decente”⁹. Poder-se-ia, em suma, afirmar que a Igreja Católica medievla só tolerava e autorizava as relações sexuais: 1) levadas a cabo pelo casal legítimo unido através do sacramento de matrimónio; 2) acompanhadas de uma evidente intenção de procriação; 3) cumpridas sem nenhum apetite carnal nem deleite torpe. Carecendo de um dos sobreditos elementos fundamentais, mesmo suavemente, essas condutas foram julgadas pela Igreja Católica como pecaminosas.

Podemos confirmar, através da minuciosa leitura do texto original da obra *Modus Confitendi et Examinandi*, várias confissões feitas pelos crentes de ambos os sexos manifestando terem praticado vários actos “indecentes” cometidos só de forma a satisfazerem o prazer carnal ou deleite torpe, actos esses que não têm nada a ver com a reprodução do ser humano.

Veja-se o seguinte trecho visto na primeira confissão acerca do sexto mandamento: “Cono vchi ni chiguiro no ioi xiauxa ga nai toqi va, sore ni xitagatte nari xidai sono gotai ni te vo caqe, cuchi vo sui, idaqi, fagi vo saguru coto tô va vomô mama ni xi marasuru” [この中に、契りのよい仕合はせが無い時は、それに随ってなり次第その五体に手を掛け、口を吸ひ、抱き、恥を探ること等は思ふままにしまらす] (“Quando não consigo consumir o meu desejo [com a manceba], faço todas as coisas possíveis, acariciando-lhe e excitando-lhe os sentidos de todo o corpo, chupando-lhe a língua, abraçando-a, mexendo-lhe nas partes pudendas, etc, conforme me apetecia”).

⁹ Cf. Abe Kin'ya, *Seijō Chūsei no Otoko to Onna: Seisei no Jubaku no naka de*, Tóquio, Chikuma Shobō, 1991.



このあたりの日本語原文。天理大学附属天理図書館蔵『コリヤード 懺悔録』(ローマ、1632 年刊)より

Texto original japonês do presente parágrafo. *Modus Confitendi et Examinandi* (.....) ou *Niffon no Cotobani yô Confesion* (.....) da autoria do Frei Diego Colhado, O. P. (Biblioteca de Tenri, Universidade de Tenri)

Parece que o acto de «Cuchiyo sũ» não era idêntico ao de “beijar” ou “oscular”, pois Furuyama Moroxighe〔古山師重〕 escreve o seguinte, ensinando-nos uma técnica “requintada” do presente acto, na sua obra intitulada *Cõxocu Tabimacura*〔『好色旅枕』(*Kõshoku Tabimakura*) publicada no ano de 1695: “Não faças a mulher chupar-te a língua. Fazendo a mulher deitar a língua de fora e engolindo-a na tua boca, deves agarrá-la e lambê-la de maneira a que não a mordas”〔男の舌を女に吸はすこと勿れ、女に舌を出させ男の口へとり込んで、齒のさゝらぬやうに唇にて女の舌をしごきねぶるべし〕¹⁰.

Tal acto, tido como pecaminoso a partir da óptica católica, tornou-se num alvo de comentário «profano» no sobredito género literário de natureza vulgar. O facto de a gente plebeia no período Edo ter utilizado o beijo profundo e persistente como uma acção amorosa é verificado pela seguinte obra do «Senryū» contida na colectânea intitulada *Faifū Yanagidaruru*〔『俳風柳多留』(*Haijū yanagidaruru*) publicada a partir do ano de 1765 até ao ano de 1840, a qual diz: “Acqenai deai ronojiuo xita bakari”〔あつけない出合呂の字をしたばかり〕(*Akkenai deai ronoji wo shita bakari*). Tradução livre portuguesa e nota explicativa: “Por ocasião do encontro secreto a ser despachado com tanta pressa, não se pode fazer outra coisa senão darem-se «Ronoji», ou seja, beijos profundos e persistentes”. A palavra «Ronoji»〔呂の字〕 não é nada mais que a contrassenha com a significação de «beijos profundos», pois o ideograma «呂」 tem a forma de juntarem-se duas «Cuchi»〔口〕, ou seja, duas bocas ligadas por uma linha oblíqua¹¹.

¹⁰ Cf. Shirakura Yoshihiko, *Shunga de yomu Edo no irokoi: Ai no mutsugoto «Shijūhatte» no sekai*, Tóquio, Yōsensha, 2003, pp.32-34).

¹¹ Cf. Watanabe Shin'ichirō, *Edo Bareku Koi no Ironaoshi*, Tóquio, Shūeisha Shinsho, 2000, p.28.

5 O adultério por meio de obscenações cometido por ambos os sexos

Ainda nos recordamos claramente de uma banda desenhada, bem antiga, intitulada *Fuji Santarō* da autoria de Satō Sanpei (publicada em *The Asahi Shinbun*, 22 de Maio de 1971, que é um dos jomais mais qualificados do Japão). Uma freira católica “gostosa”, antes de entrar num comboio superlotado na metrópole, fala com Santarō, pedindo-lhe que leia Mateus, 5: 27-28. Tal ensinamento bíblico só constitui uma matéria de humor sorridente a partir do ponto de vista «profano» do povo japonês em geral. Leiam-se a quinta e a nona confissões acerca do sexto mandamento, uma por um confessado e outra por uma confessada:

Sono foca mime catachi no ioi vonna vo miru tabi goto ni acunen ga vocotte sôbet are to gana! to nozome domo, toqi niotte va, sono mōnen vo fārōte fuxegui marasuru. Dôxin xita no cazu va voboie maraxenu. Xicamo vonango no teitō xindai va, me ni cacari xidai de gozaru.

その外、見目・容のいい女を見る度ごとに悪念が起こって、惣別あれとがな！と望めども、時によつてはその妄念を払うて防ぎまらす。同心したの数は覚へませぬ。しかも女の梯登・次第は目に懸かり次第でござる。

Sempre que vejo mulheres lindas e de feição e figura eminente e encantadora, ocorrem-me à ideia maus pensamentos, cogitando quase sempre: ‘Oxalá pudesse copular com elas!’, mas, de vez em quando, consigo evitar cair no pecado, afastando de mim os ditos pensamentos. É, porém, tão frequente cair neste vício que nem me consigo lembrar ao certo do número de vezes que o cometi. Em suma: sempre que formosas mulheres passam em frente dos meus olhos, cometo o pecado com umas atrás das outras.

Tais «maus» pensamentos associados ao sexo masculino são representados sem reboço na seguinte obra do «Senryū» elaborada no ano de 1777 e contida na colectânea intitulada *Xenryū feō mancu auase cachicu zuri* [『川柳評万句合勝句刷』] (*Senryū hyō manku awase kachiku zuri*), na qual se pode ler: “Voreuo xitacarōto vomō iy vonna” [おれをしたかろうと思ふいゝ女] (*Ore wo shitakarō to omō ii onna*). Tradução livre portuguesa: “Está a passar por aí uma mulher «jeitosa» que deve cuidar que quero fazer amor com ela.....”¹²

¹² Cf. Watanabe Shin’ichirō, *Edo Bareku Koi no Ironaoshi*, pp.37-38.

17 世紀初め日本人信徒がモーセの第六誡に関して行なった告解をめぐって



サトウサンペイの4コマ漫画『フジ三太郎』(1971年5月22日付『朝日新聞』朝刊)。マタイ伝の教えもフツーの日本人には茶化しの対象でしかない。ポルトガルのカトリック読者の想像に委ねたく、『ア・ベイラ』ではわざと“説明”を省いた

Banda desenhada intitulada *Fuji Santarō*, a qual foi apresentada em *The Asahi Shimbun* datado a 22 de Maio de 1971.

Mata uaraua uotoco iori mime catachi no iō utçucuxij uonnato fomeraruru toqi va isami iorocobi, mata qini ai, ioi uotoco no tçuqiai no jibun niitte mo, xinjit cara netacatta coto mo sando gozari, dôxin xeide, tada ua sora ni sō mōxita coto mo xetxet de gozatta.

また、妾、男より貌・姿のよう美しい女と褒めらるる時は勇み悦び、また気に合ひ、よい男の附合ひの時分によつても、真実から寝たかつたことも三度ござり、同心せいで、ただは空にさう申したことも節々でござつた。

Sempre me senti encorajada e me alegrei por ser louvada a minha beleza pelos homens. Do fundo do coração, quando me encontrava com homens que me agradavam bastante, pensei, por três vezes, dormir com eles. Quando um homem me convidava a dormir com ele, recusava o convite, mas frequentemente dizia baixinho, entre dentes, o que gostaria de fazer.

Os sobreditos «ruins» pensamentos associados ao sexo feminino, como é de esperar, atraíam, segundo nos parece, uma maior atenção dos pintores e escritores «profanos» no período Yedo. Segundo Shirakura Yoshihiko [白倉敬彦], relativamente às pinturas eróticas (mas primorosas, segundo confiamos seguramente) chamadas «Shuga» [春画] (Xunga) elaboradas na segunda metade do período Yedo, o número das obras que representam as mulheres masturbando-se é muito maior do que o das obras que pintam os homens dedicando-se ao «Docuracu» [独楽] que quer dizer “prazer satisfeito por si próprio”. Na colectânea intitulada *Icuyo no yume* [『幾夜廻遊女』] da autoria de Vtagaua Cunimaro [歌川国麿] publicada nos anos de 1848-51, aparece uma freira budista que se masturba enquanto olha uma pintura do seu actor favorito, dizendo: “Ai! Estou-me a excitar cada vez mais. Numa ocasião como esta, tenho a sensação de fazer com que qualquer homem, mesmo um pouco feio, copule comigo. Penso que haveria, por aí, homens que não poderiam fazer amor à vontade... A vida sempre está cheia de contrariedades!” [エゝも、どうもよくなつてきた。こんなによくなつてきた時は、少々悪い男でもよいからさせたいものだ。世間に不自由してゐる男もあらふに。まゝならぬが浮世じやなア]¹³

6 O «fazer poluição por suas mãos» cometido especialmente pelo sexo feminino

Entre as condutas consideradas como pecaminosas por não se encontrarem directamente relacionadas com a procriação do ser humano, a mais típica é, evidentemente, a masturbação, quer cometida pelo sexo masculino, quer cometida pelo sexo feminino. No manual *SALVATOR MUNDI*, acima citado, vê-se a seguinte interrogação: “Tezzucara jainuo moraxitariya? Mata

¹³ Cf Shirakura Yoshihiko, *Shunga de yomu Edo no irokoi: Ai no mutsugoto «Shijūhatte» no sekai*, pp.301-306.

17 世紀初め日本人信徒がモーセの第六誡に関して行なった告解をめぐって mōnenni yotte fitono mini teuo furetaru coto ariya?” (“Tiveste poluição por tuas próprias mãos? Ou tocaste no corpo de outrem com tuas mãos por motivo do pensamento torpe e sensual?”). No *Vocabulário da Lingoa de Iapam* registam-se duas palavras significando a «masturbação», não «onanismo» na sua verdadeira acepção da palavra. Uma é «Xenzuri»[せんずり], palavra propriamente japonesa, a qual é definida como «*Pollução feita por suas mãos*. ¶ Xenzuriuo caqu[せんずりをかく]. *Ter pollução*» (f.296v), sendo outra «li-in»[自淫], palavra proveniente do chinês, a qual é declarada como «Mizzucarano in[自らの淫]. *Propria pollução*» (f.142).

É bem conhecido que a origem da palavra «onanismo» reside no episódio visto no Antigo Testamento (Génesis 38: 6-10). Transcrevemos aqui a nota dada a 38: 9-11 do Génesis. “De *Onan* deriva o vício do «onanismo», contra a procriação. Aqui, o que directamente se reprova não é o derramar o sémen, mas a violação da *lei do levirato*, ao negar-se a dar descendência à esposa, que lhe deve fidelidade sob pena de morte. Sua morte prematura é castigo do “onanismo”. A viúva sem filhos deveria ir novamente para a casa do pai (Lv 22,13; Rt 1,8)”¹⁴

É por demais evidente que a conduta dos confessados narrada não só na primeira mas também nas segunda, sexta e décima terceira confissões é fundamentalmente diferente do pecado de Onan. A conduta dos confessados sempre diz respeito ao «coito interrompido» (*coitus interruptus*), emissão contraceptiva ao lado do vaso e não poluição manual praticada a sós¹⁵, dado que a masturbação masculina narrada nas ditas confissões não é nada mais do que o acto proibido por São Clemente de Alexandria (por volta de 150-211) que pretendia que o esperma não fosse ejaculado em vão, nem danificado, nem mal empregado, pois tinha sido destinado por Deus para a reprodução do homem¹⁶.

Não existia, segundo parece, durante todo o período Yedo, uma proibição rigorosa e organizada do acto de masturbação assim como do onanismo. Pelo contrário alguns pintores da «Shunga», ou para melhor dizer, «Varaiye»[笑ひ絵] («Warai-e», ou seja, “a pintura que nos faz rir”), como por exemplo, Tçuqivoca Xettei[月岡雪鼎](Tsukioka Settei), como uma nota explicativa junta à pintura – contida na colectânea intitulada *Yendō nichiya jofōqi* [『艶道日夜女宝記』](*Endō nichiya*

¹⁴ *Bíblia Sagrada. Para o Terceiro Milénio da Encarnação*, p.78.

¹⁵ Cf. Guy Bechtel, *A Carne, o Diabo e o Confessor*, tra. Magda Bigotte de Figueiredo, Lisboa, Publicações Dom Quixote, 1998, p.217.

¹⁶ *Ibid.*, p.216.

joŏki) publicada por volta do ano de 1769 – representando um homem masturbando-se em frente de um quadro erótico, enumera alguns méritos – não só corporais mas também mentais – da «Jicō anmano fō»〔自行安味法〕(Jikō anma no hō), ou seja, da “massagem feita por si próprio”¹⁷.

Leia-se a sétima confissão acerca do sexto mandamento, na qual uma confessada comete o pecado em questão:

Varera fubon no guan no mono de gozaru vo Christian xu mina xirarete, ienpen no sata sucoxi mo gozaraide, iocoxima no nen ga qizasu toqi va, mi vo xexxite nari tomo fuxegu coto mo ari, mata amari qitçũ sono mōnen ni vocasaruru toqi niotte va, ie fuxegui todoqeide, mi vo caqi saguri, ano cata ni iubi vo saxi ire, votoco to nete voru furi vo itaite, xi go rocudo sono inracu vo togue fatasu iōni mi vo igoqi vocoxi maraxita.

我等不犯の願の者でござるをキリシタン衆皆知られて、縁辺の沙汰少しもござらいで、邪の念が兆す時は、身を接してなりとも防ぐことも有り、またあまりきつうその妄念に犯さるる時によつては、え防ぎとどけいで、身を掻き探り、あの方に指を挿し入れ、男と寝て居るふりを致いて、四、五、六度その淫樂を遂げ果たす様に身を動き起こしました。

O facto de eu ter feito voto de castidade é bastante conhecido entre os cristãos, pelo que nenhum me faz propostas de casamento. Quando me ocorrem os maus pensamentos, costume evitá-los para não cometer o pecado, mortificando-me, mas, tendo sido terrivelmente atormentada pelos sobreditos pensamentos, não consegui resistir-lhes, acariciando-me, e, apalpando o corpo, inseri os dedos nas partes vergonhosas, sacudindo-me de maneira a cumprir o deleite torpe, fingindo dormir com um homem. Fiz tal coisa quatro, cinco ou seis vezes.

7 Que é o «Yobai»?

Antes de apresentar a décima e a décima primeira confissões feitas por uma crente, cabe-nos gastar algumas palavras sobre um costume etnológico que perdurou por muito espaço de tempo no arquipélago japonês, costume esse que ainda se mantinha vivo entre a camada plebeia, mais concretamente, em vilas e aldeias de lavradores e pescadores, até após a Segunda Guerra Mundial, em especial, na parte meridional e ocidental do Japão. No quadro do presente costume sempre existia um organismo educacional administrado de uma forma autónoma e rigorosa pelos jovens de ambos os sexos chamado «Wakashugumi»〔若衆組〕, etc. (Grupo dos

¹⁷ Cf Shirakura Yoshihiko, *Shunga de yomu Edo no irokoi: Ai no mutsugoto «Shijūhatte» no sekai*, pp.307-313.

Jovens) ou «Musumegumi» [娘組] (Grupo das Raparigas), organismo esse que foi controlado sob um regime de rígida hierarquia. Os jovens, desde 15 anos de idade, participam no dito organismo sempre acompanhado de dormitório chamado «Neyado» [寝宿], aí tendo sido disciplinados e ensinados pelos colegas mais idosos a produzir utensílios agrícolas, a concertar a rede de pesca, etc. As meninas, desde 13 anos de idade, ingressam no presente organismo também acompanhado daquele «Neyado», aí tendo sido ocupadas em várias tarefas manuais, tais como a produção de fios provenientes das fibras de batatas, o fabrico de panos de algodão, o moer do trigo em pó, etc. Os jovens fazem visitas ao «Neyado» das raparigas, conversam e divertem-se com elas, ajudando as suas colegas nos trabalhos. Caso um rapaz consiga arranjar uma menina favorita, decide visitar a casa dela, de forma escondida, de noite, mas sob a tácita autorização dos pais da menina. Chama-se o «Yobai» [夜這い]¹⁸ tal conduta levada a cabo por um jovem solteiro para com uma menina solteira.

Veja-se a décima confissão, na qual a confessada nos transmite o ocorrido que lhe provocaria o pecado a ser esclarecido na seguinte confissão:

Sono uie, uare ga natçu no atçusa de iogui uo cabuxe canete, qe nozoite, mino uie ni nani mo nai, nete uoru tocoroie fito ga sorosoro to chicazzuite, ionaca no jibun ni sono nedocoro ga curõ gozaredomo, canete cara sono caqugo ga atte, niuacani miga mune ni te uo caqe saguri, nani mo iuazu ni, uieni norareta tocoro vo sari fazzusõ tote fataraita redomo, are ua sosoiaite, zozomeita raba uchi corosõ to mi uo uodosareta tocorode, chicõ uoru uchi no mono iori uoboieraruru mai tameni, amari uoto vo xenanda redomo, sono iõni furio na coto uo coraie canete, nacaba ua uosore, nacaba ua xicatte, tçuini sore uo cuchi de cami, te de saxi ague, jiiüni fatasaxe maraxeide, inaxe maraxita. Core ua ichido de gozatta.

その上、我が夏の暑さで夜着を被せかねて、蹴除いて、身の上に何も無い、寝て居る所へ人がそろそろと近付いて、夜中の時分にその寝所が暗うござれども、かねてからその覚悟が有って、俄に身が胸に手を掛け探り、何も言はずに上に乗られたところを去り外さうとて働いたれども、あれはそそやいて、ぞぞめいたらばうち殺さうと身を威されたところで、近う居る内の者より覚えらるるまい為に、あまり音をせなんだれども、その様に不慮なことを堪えかねて、半ばは恐れ、半ばは叱って、終にそれ

¹⁸ Consta no *Vocabulário da Lingoa de Iapam* a presente palavra (f.322). Mas a sua definição («O chegar-se a alguma mulher que não he legitima dentro da mesma casa secretamente») é de teor suvemente diferente daquele que tentámos fazer aqui.

を口で噛み、手で差し上げ、自由に果たさせませいで、去なせました。これは一度でござった。

Numa noite de Verão de muito calor eu dormia sem lençol, o qual afastei do meu corpo com os pés, ficando sem nada sobre a camisa de dormir¹⁹. Foi então que um homem se aproximou devagar. O quarto estava escuro e por volta da meia-noite este, preparando-se para fornicar comigo, tocou-me de repente e apalpando-me, acariciou-me o peito, atirando-se, sem dizer nada, para cima de mim. Esforcei-me por afastá-lo, mas ele disse-me à boca calada que matar-me-ia com murros se eu porventura gritasse. O homem, para não ser percebido pelas minhas criadas que dormiam próximo, não fez muito ruído. Não aguentando tal procedimento inesperado, resisti com os braços e acabei por conseguir fazê-lo ir-se embora. Mordendo-o e empurrando-o com as mãos, o que fiz em parte por causa do medo e em parte por causa da ira, não lhe permiti que satisfizesse o desejo carnal à vontade, levando-o a abandonar-me. Isto aconteceu uma vez.

Veja-se a seguir a décima primeira confissão feita pela mesma confessada esclarecendo ter, por fim, caído no pecado de «adulterio»:

Ma ichdo ua chōdo maie no gotoqu ni uonaji mono ga qite miuo uocasō tame
sucumerareta reba, fajime ua miga qi ni auazu, canete cara mo sono iacusocu iumeni
mo gozaraide suoxi taican fenqi xita redomo, cocoro ga jinen catamuqi iotte, tçuini
ichido togani vochi maraxita. Sono toga va miga fajime de gozatta.

ま一度は、ちやうど前の如くに、同じ者が来て、身を犯さう為、竦められたれば、初めは身が
気に合はず、かゝてからもその約束夢にもござらいで、少し対捍・偏氣したれども、心が自然傾
き寄って、終に一度科に落ちました。その科は身が初めてござった。

Numa outra vez, como noutra ocasião, o mesmo homem entrou às escondidas, agarrando-me à força, de maneira a que nem me mexesse nem bulisse, com a intenção de me violar. Como não gostava dele de início e não tinha pretensão, nem por sonhos, de fazer tal coisa com ele, mostrei-lhe repugnância e resisti-lhe um pouco, mas gradualmente tendi a ter carinho por ele, caindo, por fim, no

¹⁹ Para efeitos de compreensão do texto original, adicionámos o vocábulo “a camisa de dormir”, o qual pretende indicar que o corpo da figura do sexo feminino estava sem lençol em cima do corpo devido ao calor, não se encontrando, porém, nua.

pecado uma vez. Esta é a minha primeira experiência de ter cometido tal pecado.

Permitam-nos que insiramos aqui a citação de uma outra obra do «Senryū», pois, de algumas obras profanas deste género literário que tentámos traduzir, de maneira livre e explicativa, em português, esta se nos afigura a mais engraçada e nos é favorita. Tal sentimento da confessada em questão poderá ser bem interpretado na seguinte obra contida na colectânea *Faifū Yanaguidaru*, a qual diz: “Areareno renoji dandan funxit xi” [あれあれのれの字段々紛失し] (Areare no renoji dandan funshitsu shi). Tradução explicativa portuguesa: “As mulheres forçadas a copular, ainda que digam várias palavras de rejeição tais como «Areare» nos começos, costumam perder gradualmente a sílaba «Re» à medida que se lhes aprofunda o deleite torpe”²⁰.

Se bem que o acto de uma rapariga aceitar o convite de um homem antes de contraírem o sacramento de matrimónio seja considerado como pecaminoso a partir do conceito de valores católico, o «Yobai» constituía, pelo menos entre a camada plebeia, uma conduta natural e “legal”, de molde a que os jovens de ambos os sexos conseguissem obter bons parceiros, tendo assim evitado cair nuns «desencontros» antes de se tornarem num casal.

Sendo raro, claro, o caso de apenas um rapaz ter praticado o «Yobai» para com uma donzela, acontece que, quando a rapariga engravida e dá à luz um bebé, se desconhece quem é o seu pai “biológico”. Mas, Akamatsu Keisuke (1909-2000), etnólogo e grande conhecedor das circunstâncias relativas ao «Yobai» comenta: “Nos inícios do período Taishō [大正時代] (1912-26), numa vila na parte oriental do antigo reino de Harima (ou seja, na região sudoeste da actual prefeitura de Hyōgo) achou-se um chefe, colocando uma criança sobre as pernas, fez outrem rir, dizendo descaradamente: ‘A cara desta criança não é parecida com a minha, não é verdade?’ Dado que toda a gente plebeia tem a liberdade de fazer o «Yobai», etc, afigura-se-me naturalíssimo acontecer tal incidente, pelo que não há bobos nenhuns que digam mal ou façam tanto caso disso”²¹. A título de curiosidade consta no *Vocabulario da Lingoa de Iapam* uma frase feita «Tanega cauaru» [唄が変はる] com o sentido de: «Serem dous, ou mais filhos da mesma mãy, & de diferente pay», o qual far-nos-ia presumir que tal coisa acontecia bem frequentemente.

Eis aqui, como é de esperar, uma obra profana do «Xenrū» contida na colectânea *Faifu Yanaguidaru*: “Teteuoyani ninuuo xittaua fafa bacari” [てて親に似ぬを知ったは母ばかり] (“Teteuoyani

²⁰ Cf. Watanabe Shin’ichirō, *Edo Bareku Koi no Ironaoshi*, p.143.

²¹ Akamatsu Keisuke, *Yobai no Seiai-ron*, Tóquio, Akashi Shoten, pp.109-110.

ninuwo shittawa haha bakari”). Tradução livre portuguesa: “A mãe foi a única pessoa que chegou a conhecer o facto de a criança recém-nascida não ser parecida com o pai legítimo (ou biológico)”²².

8 Sob a Pax Tocugauana, as mulheres japonesas eram castas?

No conceito moral do Confucionismo aquilo que se intitula como castidade é imposta apenas sobre as mulheres e os homens não têm nenhuma obrigação em respeitá-la. Tal pensamento simboliza-se nos seguintes dois preceitos: «Três Obediências»[三從] e «Sete Saídas»[七出]. O preceito das «Três Obediências» é proveniente da escritura intitulada *Nijie* [女戒] da autoria da historiadora de nome Hanchao [班昭] da Dinastia Han [漢] (a.C 206-d.C 202), a qual diz: “A mulher, antes do casamento, obedece aos seus pais; depois do casamento, obedece ao seu marido; após a morte do marido, obedece aos seus filhos”[在家從父母, 出嫁從丈夫, 夫死從子女]. O preceito das «Sete Saídas» é oriundo da Lei de família e casamento chamada «Hunhuli»[戶婚律] contida no vol.14[卷十四] do Código Penal Unificado da Dinastia Song (960-1279) de nome *Songxingtong* [宋刑統], na qual são enumeradas as sete razões desfavoráveis pelas quais a mulher se via obrigada a sair de casa do seu marido: 1. o não ter filhos; 2. o ser luxuriosa ou adúltera; 3. o não servir ao sogro nem à sogra; 4. o ser tagalera; 5. o ter mania de furtar; 6. o ser invejosa; 7. o ter doenças graves[一無子, 二淫佚, 三不事舅姑, 四口舌, 五盜竊, 六嫉妬, 七惡疾]²³.

Será então que, durante o período Yedo (1603-1868), período em que foi introduzida a moral confucionista no Japão, as mulheres seriam sempre castas? No capítulo 4º intitulado «Megatakiuchi»[妻敵討ち] do interessantíssimo livro *Fughi Mittsū: Kinjirareta Koi no Edo* da autoria de Ujiie Mikito (Tóquio, Kōdansha Sensho Metier, 1996), apresentam-se e analisam-se várias fontes acerca deste tema. O compilador do *Vocabulário da Língua de Iapam* não se esquece de incluir um verbete «Megataqi»[妻敵], explicando: «Inimigo adúltero que vsa, ou toma a mulher alhea. ¶ Megataquuo vtçu [妻敵を討つ]. Matar ao inimigo que lhe anda com sua mulher» (f.155).

O conceito de um marido poder (ou dever) matar tanto a mulher adúltera como o adúltero, tendo já existido nos inícios do período Camacura [鎌倉時代] (1185-1333), foi legislado

²² Watanabe Shin'ichirō, *Edo Bareku Koi no Ironaoshi*, p.57.

²³ Agradecemos cordialmente a Jin Guoping [金國平] pela ajuda e colaboração ao escrever o presente comentário.

explicitamente pelos dáimios espalhados em vários reinos do Japão. Sucedida esta razão jurídica pelo xogunato de Yedo, no código penal chamado *Cujigata Vosadamegaqi* [『公事方御定書』] completado no ano de 1742 sob o governo do oitavo xogun Tocugaua Yoximune [徳川吉宗], foi decidido que uma mulher adúltera deveria ser morta junto com o seu amante pelo respectivo esposo, caso existisse uma prova factual evidente [密通之男女共ニ夫殺候は、於無紛ハ、無構], à semelhança do que acontecia em Israel no período do Antigo Testamento, onde se diz: “Se um homem cometer adultério com a mulher do seu próximo, o homem adúltero e a mulher adúltera serão punidos com a morte” (Levítico 20:10); “Quando um homem for surpreendido a dormir com uma mulher casada, ambos deverão morrer; o homem que dormiu com a mulher e também a mulher. Assim extirparás o mal de Israel” (Deuteronómio 22:22-24).

O sobredito acto «Megataquio vtçu», ou seja, de «*Matar ao inimigo que lhe anda com sua molher*» constituía um privilégio que era concedido não só aos samurais mas também às pessoas da camada plebeia.

No estado feudal de Cocura [小倉] na ilha Qiũxũ [九州] (Kyũshũ) setentrional, ocorreu no ano de 1629 um caso em que a mulher de um comerciante ficou ferida por um «Axigaru» [足輕] – «*Soldados ligeiros que na batalha vão na vanguarda, & de quando em quando dão assaltos nos imigos, ou vão a descobrir o câpo*» (Vocabulário da Língua de Iapam, f.16v) – com quem continuava a ter relações imorais e o «Axigaru» suicidou-se cortando a sua barriga. O marido da adúltera fez uma petição às autoridades dizendo: ‘Varera zonji sōrauaba, fataxi mõsu becuuo, munenni zonji soro’ [我等存候は、はたし可申を無念ニ存候] (‘Se tivesse sabido das relações já havidas entre os dois, ter-me-ia vingado com toda a certeza, e lamento muito não ter podido fazê-lo’) e reclamou ainda: ‘Xicarũ vyeua vonnauo teni caqe mõxitacu zonji sōrõ aida, sono bunni vōxetçugerare cudasare sōraye’ [然上ハ女を私手ニかけ申度存候間、其分ニ被仰付被下候へ] (‘Gostaria, desde já, de matar a mulher por minha própria mão, pelo que queirais ordenar-me que faça conforme à minha vontade’).

Segundo a colectânea dos precedentes legais do estado feudal de Xendai [仙台] (actual Sendai) intitulada *Qeibatçuci* [『刑罰記』], no ano de 1724 o fabricante do «Sōmen» [素麺] – «*Letrias*» (Vocabulário da Língua de Iapam, f.224v) – de nome Tanacaya Qiyemon [田中屋喜右衛門] foi denunciado pela unidade de mútua vigilância chamada «Goningumi» [五人組] (Grupo dos Cinco) por ter confinado a sua mulher ao domicílio. Interrogados os membros da casa de Qiyemon, foi esclarecido o facto de a sua mulher ter cometido adultério com o seu servo. Qiyemon tentou demiti-lo, mas, para sua grande inconveniência, o criado em questão servia-lhe de parceiro da pederastia. A mulher teve ciúmes das relações entre os dois, pedindo-lhe, por fim,

que: ‘Megata yemo t̃cucauxi s̃rō yōni’ [妻方へも遣し候様ニ] (‘enviasse o dito criado à esposa também’), o que tornou toda a situação ainda mais complicada. Qiyemon pensou que, se oferecesse o seu servo à sua mulher, ela cometeria adultério de novo com ele, temendo ao mesmo tempo que, se recusasse o pedido dela, a sua mulher, furiosa, o matasse com veneno, pelo que Qiyemon, cheio de medo e preocupação, foi forçado a obedecer-lhe e abandonar a ideia de o demitir.....

No entanto, falando de um modo geral, o castigo disciplinar contra o adúltero e a adúltera era muito severo durante todo o período Yedo. Tendo em consideração vários exemplos apresentados e analisados no sobredito livro *Fughi Mittsū*, se bem que seja certo poderem-se confirmar alguns exageros evidentes, parece-nos impossível julgar a seguinte descrição de Francesco Carletti, o qual viu a realidade de Nagasaqui no ano de 1597, como inteiramente falsa. Este comerciante-aventureiro florentino informa-nos que: “questi popoli, ancorche sieno Gentili usano di prendere una sola donna, e tengono grandissimo conto dell’ adulterio, il quale puniscono severamente con pena di morte d’ ambedue, mettendoli legati colle mani dietro a casa del marito, ed in sua presenza tagliando il membro virile all’ uomo con tanta pelle del corpo, che faccia com’ una cussia, la quale mettono in testa alla donna adúltera, alla quale tagliano della sua parte vergogna. Una striscia intorno alla sua natura, colla quale fanno una ghirlanda, che mettono sopra il capo dell’ uomo adúltero, e così consi, e adorni di que’ membri vanno per tutta la Città nudi, facendo miserabile, e vergognosa mostra de’ loro corpi a tutto il popolo; mentre uscendo loro il sangue da qualle parti offese siniscovo vitupersamente la vita”²⁴.

É um facto que no período Yedo tanto o xogunato como os dáimios sujeitos ao xogun tentaram espalhar a moral de Confúcio entre a camada plebeia, desejando assim fazer dela um instrumento útil para subjugar e oprimir a mentalidade do povo nipónico em geral. As autoridades xogunatas, de acordo com o conceito de valores confucionista, sempre deram ênfase à importância da «purificação» de sangue paternal, promovendo assim «bons costumes» relacionados à doutrina de Confúcio, mas, por outro lado, tal conceito foi julgado, pelo menos entre a camada do povo, como sendo uma matéria vaga e superficial, a qual tendia a ser, não raras vezes, não respeitada nem até ridiculizada, como é evidente

²⁴ Francesco Carletti, *Ragionamenti di Francesco Carletti Fiorentino sopra le cose da lui vedute ne’ suoi Viaggi si dell’ Indie Occidentali, e Orientali come d’ altri Paesi*, Firenze nel Garbo, 1701, pp.71-72.

através da investigação de algumas confissões feitas pelos confessados casados principalmente do sexo masculino.

Veja-se a quarta confissão acerca do sexto mandamento feita por um crente divulgando ter cometido adultério com uma mulher casada, cujo marido se encontrava no estrangeiro devido ao negócio:

Ma ichido va, votto no aru vonago to toga ni vochimmaraxite, sono votto va rusu de gozatta niotte, tennen qichô xerareô toqi, sono vonna quainin ni nattaraba, votto iori sore vo xitte corosareô to qizzucaï xite vomôta reba, tocacu codane ga, vel, sane, vel, in ga, uchi ni iri tomaranu iô ni, caracuri itaxi maraxita.

ま一度は、夫の有る女と科に落ちまらして、その夫は留守でござったによつて、天然帰朝せられう時、その女懐妊になつたらば、夫よりそれを知つて殺されうと氣遣ひして思ふたれば、とかく子胤が、(または)核、(または)淫が内に入り止まらぬ様に、からくり致しました。

Numa outra vez, durante a ausência do seu marido, caí em pecado com uma mulher casada. Se quando o marido regressasse do estrangeiro ao Japão*, como seria normal, ela estivesse grávida, este matá-la-ia, por isso mesmo, temendo-o, fiz uma invenção artificiosa de maneira a que não guardasse a semente da criança.

*Tocugaua Iyeyasu, xogun e fundador do xogunato de Yedo, foi promotor do trato comercial exterior, nomeadamente com Manila (Filipinas), Ayutaya (Sião), Patane (costa oriental da Península Malaia), Camboja, Vietname, etc. Os comerciantes oficializados pelo xogunato ou pelos dáimios, já nos inícios do século XVII, aquando da viagem para o exterior, portavam a patente de privilégio chamada «Xuinjô» [朱印状], tendo assim conseguido gozar do patrocínio das autoridades parceiras estrangeiras. O esposo da mulher aparecendo nesta confissão deve ser um desses comerciantes.

Uma obra bem profana do «Xenriû» contida na colectânea intitulada *Saibare* [『最破礼』] publicada no ano de 1796 provavelmente por Aqera Cancô [朱楽菅江] (Aqera Kankô) descreve o seguinte episódio trágico ocorrido com uma adúltera casada: “Sudeni ima saigono fusuma teixu aqe” [すでに今最期の襖亭主明け] (Sudeni ima saigo no fusuma teishu ake). Tradução livre portuguesa: “Quando está prestes a terminar o deleite torpe com um homem na cama, o marido da adúltera

abre a sua porta corrediça de papel (e madeira). Uma coisa que acontece de vez em quando...»²⁵

9 Alguns métodos anticoncepcionais

Dado que se têm por pecaminosas, conforme à moral sexual católica, as relações sexuais sem objectivo de procriação, o controlo da natalidade por meio de vários métodos anticoncepcionais deve ser considerado como um pecado que contraria a vontade de Deus, vontade essa explícita aquando da criação do ser humano: “Crescei e multiplicai-vos, enchei e dominai a terra” (Gênesis 1:28).

A confissão acima analisada constitui um exemplo de um confessado ter utilizado juntamente com a sua parceira algum método anticoncepcional. Quanto à confissão da mesma natureza feita por uma confessada, cabe-nos apresentar a décima segunda acerca do sexto mandamento, confissão essa por uma crente que convivia com um comerciante português – «Nanbanjin», ou seja, bárbaro do sul – durante a estadia temporária dele em Nagasaqui por alguns meses, provavelmente a partir dos meados de Verão até aos inícios de Inverno. É interessante notar que se podem confirmar uns métodos bem concretos de então.

Vatacuxi ga varambe de futavoia vo vxinôte minaxigo ni nari maraxita. Sô atta reba, io vo suguru iô ga gozaraide, Nanban jin iori sono togui ni torarete, nuxi no iado ni iotçuqi no aida nhôbô no iôni vori maraxita. Sore cara fito ni fôcô suru coto ga mutçucaxii to qitareba, fonxô ga nôte, menbocu, chijocu tô vo mo xiraide, sono mama qeixe ni natte jôrômachie macari ite vaga mi voba conomu mono ni vrimono to xite, cono sanganen no aidani vori maraxita. Cono uchi ni qirei sa no tame to, mata vazzurai ni avanu tamenî, xi fatasareta votoco vo inasuru tanteqi xôben xite ca, cutto vchi made mo nogoi saraite ca, tocacu fucuchû ni votoco no coto ga nanimo todomaranu iôni itaxi maraxita.

私が、童で両親を失うて孤になりました。さうあったれば世を過ぐる様をござらいで、南蛮人よりその伽に取られて、主の宿に四月の間女房の様に居りました。それから、人に奉公することが難しいと聞いたれば、本性が無うて、面目、恥辱等をも知らいで、そのまま傾城になって、上郎町へ罷り行て、我が身をば好む者に売物として、この三箇年の間に居りました。この中に、綺麗さの為と、また煩ひに逢はぬ為に、し果たされた男を去なす端的、小便してか、くつと内までも拭ひ浚ひてか、とかく腹中に男のことが何も止まらぬ様に致しました。

²⁵ Cf. Watanabe Shin'ichirô, *Edo Bareku Koi no Ironaoshi*, p.108.

Quando era criança, perdi os meus pais por morte e tomei-me numa órfã, pelo que não tive nenhum remédio nem modo para ganhar a vida. De acordo com o pedido de um «Nanbanjin», isto é, um bárbaro do sul ou comerciante português, fiz-me companhia dele e vivi em sua casa por espaço de quatro meses, como se fosse a sua esposa. Ouvindo dizer que servir a «fito» (homem em geral) seria trabalhoso e difícil, perdi o juízo e prudência, e abandonei a honra e vergonha, tomando-me numa mulher pública e fazendo negócio com qualquer homem que desejava o meu corpo, como se fosse uma mercadoria – «Vrimono» –, numa zona determinada para tal. Estive nesse bairro por três anos, continuando a fazer o dito negócio. Enquanto aí trabalhava, fiz o máximo possível para, ao terminar a união sexual, não deixar o esperma do homem dentro da minha barriga – a vagina –, logo que um homem terminava e eu o fazia ir-se embora, costumava urinar ou limpar inteiramente o interior dela de maneira a que mantivesse a higiene e não apanhasse uma doença.

Conhecemos um outro bem concreto através de uma obra do «Senryū» contida na colectânea *Faifū Yanaguidaru*, a qual descreve um método anticoncepcional utilizado por mulheres públicas em Yedo, dizendo: “Xetchinye camiwo foqidasu tçutomeno mi” [雪隠へ紙をほき出す勤めの身] (Setchin ye kami wo hokidasu tsutome no mi). Tradução livre portuguesa: “As mulheres públicas são aquelas que deitam na retrete um papel higiénico, o qual tinham metido na vagina antes de iniciarem o seu negócio”²⁶.

10 «as molheres de Japão nenhum cazo fazem da linpeza virginal.....»

Conserva-se, na Biblioteca de la Real Academia de la Historia, Madrid, um autógrafo precioso da autoria do padre Luís Fróis, S. J., intitulado *Tratado em que se contem muito susinta e abreviadamente algumas contradições e diferenças de custumes antre a gente de Europa e esta provincia de Japão* (Cadzusa [加津佐], na península de Ximabara, actual prefeitura de Nagasaki, 1585). O padre Fróis, no capítulo II dedicado às “pessoas e custumes das molheres japoas” comenta o seguinte: “Em Europa a suprema honrra e riqueza das molheres moças hée a pudicicia e o claustro inviolado de sua pureza; |as molheres de Japão nenhum cazo fazem da linpeza virginal nem perdem, pola não ter, honnra nem casamento” (Capítulo 2º-39). Mesmo que não se refira

²⁶ Acabado o negócio com um homem, depois de tirá-lo e deitá-lo fora aos lavabos, elas costumavam limpar de modo inteiro o interior da vagina por meio dos seus próprios dedos, escanchando as pernas sobre o sulco onde corre o esgoto (cf. Watanabe Shin'ichirō, *Edo no Otoire*, Tóquio, Shinchō Sensho, 2002, p.106. Vejam-se as três gravuras aí reproduzidas descrevendo as prostitutas que limpam a vagina de maneira a que não aconteça a inconveniente gravidez).

directamente à ausência do respeito para com a “linpeza virginal”, o padre Fróis também nos informa os seguintes itens: “Em Europa polo rapto de huma parenta se põe toda a gerasão a perigo de morte; | em Japão os pais e as mãis e irmãos desimulão e pasão levemente por isso” (Capítulo 2º-33); “Em Europa, o emcerramento das filhas e donzelas he muito grande e riguroso; | em Japão as filhas vão sós por onde querem por hum dia e muitos, sem ter conta com os pais” (Capítulo 2º-34)²⁷.

O sobredito conceito da “linpeza virginal”, no Século Cristão do Japão (1549-1640), escusado será dizer, foi imposto não só sobre as crentes mas também sobre os crentes. Aqui somos levados a citar um comentário de índole descarado, mas bastante famoso, escrito por Akamatsu Keisuke, o qual diz: “O perder a «pureza virginal»” foi (e ainda é, provavelmente) equivalente apenas ao ficar ferida levemente na canela, caindo no chão”. Veja-se um parágrafo da décima terceira confissão acerca do sexto mandamento feita por um confessado:

Votoco uo mixiranu vonna gorocu nin no fajime no fagi²⁸ vo tori maraxita. Ichinin va damaite nhôbô vo torô to iûte nabiqi maraxite, tçuini vocaite cara, ii caiete, sute maraxita. Maichinin va fajime cara iigatta redomo, nacadachi vo tanôde amari susumeta tocorode, tçuini iro iro no iacusocu vomotte tabacatte, sono iorocobi vo motomete cara nanimi togue maraxenanda. Ichinin va mata vare to dôxin xezunba sono mama cubi vo voxi sucumete corosô to vodoxi ni iûte, sunavachi votoxi maraxite, nochi mo mitçuqi no tecaqe vo mochi maraxita. Nocori no sannin to sando zzutçu bacari vochi maraxita. Mata togueta coto ni nen vo caquru tabi goto va, sono iorocobi ni fuqeri, musabori nomi mo gozaru.

男を見知らぬ女、五、六人の初めの恥をとりました。一人は騙いて、女房をとらうと言うて靡きまらして、終に犯いてから、言い変へて、捨てました。ま一人は、初めから嫌がったれども、媒を頼うであまり勧めたところで、終に色々の約束をもって謀って、その悦びを求めてから何も遂げませなんだ。一人は、また我と同心せずんばそのまま首を押し竦めて殺さうと威しに言うて、即ち落としまらして、後も三月の妾を持ちました。残りの三人と、三度づつばかり落ちました。また遂げたことに念を掛くる度ごとは、その悦びに耽り、貪りのみもござる。

²⁷ Cf. Luis Frois S. J., *Kulturgegensätze Europa-Japan (1585). Tratado em que se contem muito susinta e abreviadamente algumas contradições e diferenças de costumes antre a gente de Europa e esta provincia de Japão*, ed. Josef Franz Shütte S. J., Tōkyō, Sophia Universität, 1955.

²⁸ «fajime no fagi» significa literalmente “a primeira vergonha” com o sentido, claro, de “a virgindade”.

Desflorei cinco ou seis donzelas que não conheciam homens. A uma virgem prometi de modo ardiloso que me casaria com ela, e depois de ter conseguido que o seu coração se rendesse a mim, desflorei-a. Porém, logo após a satisfação do meu apetite carnal, abandonei a donzela, quebrando todas as promessas por mim juradas. Outra donzela não queria copular comigo, contudo esforcei-me ao máximo para cumprir os meus intentos, utilizando até um alcoviteiro de forma a que este convencesse a donzela a tornar-se íntima de mim. Finalmente por meio de várias palavras mentirosas enganei a donzela e consegui copular com ela, roubando-lhe a virgindade. Depois de satisfazer o meu desejo carnal, escuzado será dizer, não cumpri nenhuma das promessas anteriormente prometidas. Ameacei uma outra donzela e desflorei-a, afirmando que apertar-lhe-ia o pescoço e matá-la-ia se não aceitasse a minha vontade. Após a satisfação do meu desejo carnal, continuei a sustentá-la como concubina por três meses. Cometi o semelhante pecado para com outras três donzelas, uma vez respectivamente. De vez em quando vangloriava-me e deleitava-me sozinho, trazendo à lembrança os saudosos prazeres de que gozei através da cópula com aquelas donzelas e mulheres.

No fim da obra *Modus Confitendi et Examinandi*, encontram-se impressas algumas admoestações por parte do confessor, mas no que se concerne ao sexto mandamento, o número de admoestações pelo confessor é apenas um, apesar de se contarem 15 confissões relativamente ao sexto mandamento. O confessor, provavelmente, julga excessivamente graves aquelas ruins condutas, condutas essas que foram cometidas para com umas «virgens», dizendo:

Nhôbô ni torô to iûte fubon no vonna vo votoxiatta coto no toga va, sono iacusocu vo toguezu xite iurusare mai to cocoroie are. Tadaxi iôsu²⁹ gavar³⁰ ga atte, sô narani ni voiteva, xemete sono cavari ni niai no coto voba sono vonago ni iarareide va. Vonajiqu: iroirono iacusocu de tabacatta fubon no vonago ni, sono iacusocu ni xitagatte tçutome vo mesareio.

女房ことらうと言って不犯の女を落としあつたことの科は、その約束を遂げずして赦されまいと心得あれ。た

²⁹ Yôsu [様子]. *Maneira do negocio, ou do que passa* (*Vocabulario da Lingoa de Iapam*, f. 324v)

³⁰ Cauari [変はり・替はり・代はり], Cauaru [変はる・替はる・代はる], Cauatta [変はった・替はった・代はった]. *Differenciarse, mudarse, ou trocarse* (*Vocabulario da Lingoa de Iapam*, f. 44). «Iôsu gavar» é um substantivo composto de duas palavras, ou seja, «Yôsu» e «Cauari», forma substantivada do verbo «Cauaru», mas não se vê no *Vocabulario da Lingoa de Iapam* nem no *Dictionarium sive Thesauri Linguae Iaponicae* da autoria do próprio frei Diego Colhado.

だし様子変まりが有って、さうならぬににおいては、せめてその替まりに似合ひのことをばその女に遭られい、では。同じく、色々の約束でたばかった不犯の女に、その約束に随って勤めを召されよ。

Quanto ao pecado de teres violado a mulher casta com a promessa vã de casares com ela³¹, não será perdoado até cumprires sinceramente a tua promessa. Mas, se a alteração das circunstâncias te impede de guardar o dito compromisso, terás de lhe fazer a devida recompensa, de acordo com o pecado que cometeste. Da mesma maneira, terás de cumprir as devidas obrigações para com outras mulheres castas que tens ludibriado através de várias promessas vãs.

Citamos ainda a terceira confissão acerca do sexto mandamento, a qual nos pareceria mais interessante do que quaisquer piadas brasileiras.

Aru toqi mo votto vo motta vacai vonna to toga ni vochi maraxite, xi fajimeta toqi, votto vo motta mono de gozareba, canarazu sono michi vo xitte, sara uchi vatte arō to vomôte votta redomo, sono votto ga canavaide gozatta niotte, vare va nari gatōte mo, tçuini fonni itaxi maraxita.

ある時も夫を持った若い女と科に落ちまらして、し始めた時、夫を持った者でござれば、必ずその道を知って、皿打ち割ってあらうと思うて居ったれども、その夫が叶はいでござったによって、我はなり難うても、終に本に致しました。

Certa vez caí em pecado com uma jovem que já tem marido. Quando iniciei relações com ela, pensava eu que esta, por já ter esposo, conheceria o caminho do sexo e que o seu «prato» – membrana vaginal – já estaria quebrado. Mas, por ter sido o marido dela incompetente, o «prato», após várias tentativas, foi por mim quebrado, o que me foi um pouco difícil. Por fim, de modo verdadeiro, consegui.

Cabe-nos adicionar uma nota explicativa relativamente à interessantíssima expressão japonesa de cariz provavelmente etnológico «Sara(uo) vchiuaru» – quebrar o «prato» – com o

³¹ Segundo o *Cathecismo Pequeno* de D. Diogo Ortiz, há sete maneiras e espécies da luxúria. Relativamente ao pecado cometido para com a virgem, encontra-se dividido em duas categorias: “A quinta, com virgem por sua voõtade, que se diz stupro. A sexta, com virgem contra sua voõtade, que se diz rapto” (*O Cathecismo Pequeno de D. Diogo Ortiz Bispo de Viseu*, ed. Elsa Maria Branco da Silva, Coleção Obras Clássicas da Literatura Portuguesa 115, Lisboa, Edições Colibri, 2001, p.238). O presente acto do confessado poder-se-ia denominar como «stupro».

sentido de “desflorar ou violar uma mulher”. Mesmo que não conste a sobredita expressão no verbete «Sara» – palavra comuníssima ainda hoje significando «Prato» – do *Vocabulario da Lingoa de Iapam*, todavia o seu significado é fácil e compreensível através do teor e contexto da confissão acima citada. Segundo Ōtsuka Mitsunobu, esta expressão com o dito sentido não se encontra em nenhuma outras fontes literário-linguísticas japonesas de então senão na presente obra e no *Dictionarium sive Thesauri Linguae Iaponicae* da autoria do próprio frei Diego Colhado, onde se vêem os seguintes verbetes:

○*Stupro, as: Desuirgar*. Sara vo uchi vari, Sara vo uchi varu [さらを打ち割り, さらを打ち割る] (p.129).

○*Constupro, as, Desflorar, desuirgar*. Sara vo uchi vari, Sara vo uchi varu [さらを打ち割り, さらを打ち割る] (p.195).

○*Deflorare, Ensuziar, manchar*. Qegaxi, Qegasu [汚し, 汚す]. Virgimem defloro, as. Vonago uo sara uchi uari, Vonago uo sara uchi uaru [女子をさら打ち割り, 女子をさら打ち割る] (p.202).

○*Deuirgino, as. Qitar la viginad*. Sara uo uchi vari, Sara uo uchi variu [さらを打ち割り, さらを打ち割る]. Inbon uo uocaxi, Inbon uo uocasu [淫犯を犯し, 淫犯を犯す] (p.209).

Ainda é de notar que existem os vocábulos japoneses empregados no plano etnográfico tais como «Jūsan kane» [十三かね] (As meninas fazem os dentes pretos com «Cane» – tinta preta misturada com vinagre – ao completarem treze anos de idade) e «Jūsan sarawari» [十三サワリ] (O «prato» das meninas quebra-se com a idade de treze anos). Tratam-se das frases feitas antigas significando que as donzelas que experimentaram a primeira menstruação com a idade de treze anos foram permitidas de modo oficial a tingir os dentes com tinta – feita de vinagre – chamada «Cane», a vestir o quimono para o uso de adultas, e a ter o relacionamento entre o homem e a mulher³². O autor deste ensaio afirma que as sobreditas frases feitas ao nível etnográfico são aquelas expressões que representam o desenvolvimento tanto físico como social das meninas. O mesmo autor não se refere à origem da frase feita «Jūsan sarawari» nem esclarece se ela aparece ou não em algumas fontes escritas. Parece-nos, de qualquer maneira, a observação acima mencionada por Ōtsuka Mitsunobu ainda tem margem para ser reconsiderada.

Só a título de curiosidade, convêm-nos citar duas obras descaradas – queremos dizer, sem nenhuma séria autorreflexão religiosa nem espiritual – do «Senryū» contidas na colectânea *Faifū Yanaguidaru*, nas quais se utiliza uma semelhante expressão: «Biidoro [vidro] uo votoxiteua

³² Sano Kenji, “Jūsan nanatsu” in *Yagai Bunka*, Shadanhōjin Seishōnen Kōyū Kyōkai, núm. 165, 20 de Abril de 2000.

varu iy votoco»[ビイドロを落としては割るいい男](Biidoro wo otoshitewa waru ii otoko). Tradução livre portuguesa: “Fazer cair uma boa mercadoria de vidro – uma virgem «jeitosa» – e quebrá-la à vontade... Esse é o invejável privilégio de um Don Juan”³³; «Varetato satoru arabachino coyegauari»[割れたと悟る新鉢の声替わり](Wareta to satoru arabachi no koegawari). Tradução livre portuguesa: “O facto de uma bacia nova – uma virgem – ter sido quebrada pode ser confirmado através da sua mudança de voz”³⁴.

11 Uma nota final

No Japão, ainda hoje, em alguns templos xintoístas, realizam-se nos dias festivos certos bailes de cariz folclórico a serem dedicados aos Camis (do Xintoísmo), nos quais são representados vários gestos eróticos evocando de forma implícita os actos sexuais efectuados pelo casal. Estes gestos actualmente são interpretados – de uma maneira «sagrada» e séria, claro! – só por homens mascarados compondo um pseudo-casal³⁵. Estas representações, segundo cremos seguramente, são reflexo do sentimento dos nipónicos – mais concretamente dos lavradores – desejosos pela abundante colheita do «Gococu», ou seja, “*Cinco cereais, ou legumes. idest. Come*[米], *mugui*[麦], *aua*[粟], *qibi*[黍], *fiye*[稗]. *Arroz, trigo & ceuada, painço, milho zaburro, & hum certo milho preto*” (*Vocabulario da Lingoa de Iapam*, f.120). Aqueles bailes, por outras palavras, representam os sinceros votos feitos pelos lavradores de forma a festejarem antecipadamente a abundância das colheitas.

³³ Cf. Watanabe Shin’ichiro, *Edo Bareku Koi no Ironaoshi*, p.139.

³⁴ Cf. *ibid.*, p.171.

³⁵ Observa-se um típico exemplo de tal baile de aparência sexual, no festivo chamado *Onda Matsuri*[おんだ祭] (“Festivo dedicado ao Respeitoso Arrozal”) realizado anualmente no primeiro domingo do mês de Fevereiro, no templo xintoísta Açucaniyimaçu Jinja[飛鳥坐神社], Nara, baile esse que conserva uma autêntica forma cerimoniosa de molde a fazerem votos pela abundância agrícola e, ao mesmo tempo, pela próspera “multiplicação” dos descendentes.



西川祐信著『枕本 太閤記』(1720 年頃)より。祐信の影響を受けた鈴木春信は、祐信に対するオマージュとして、この作品をほぼ模写、みずからの作品集に収めたうえ、これにユーモアに満ちた“吹き出し”を加えた。春信の作品では、天狗の面をかぶった「よがらすの神」(むろんペテン師)が水田で働く百姓の夫妻に対し、汝の娘を我へ差し出せば、五穀豊穡は必定、などと騙る。農夫は、手もなくその言葉を信じ、もしそれを保証してくれたら、「ムスメ」も「ハバ(婆)め」も捧げます、などと口走っている。画中の台詞で、幾重にも仕掛けられた言葉の遊びが、秀逸、というほかない

Uma pintura da autoria de Nixicaua Suqenobu contida na colectânea intitulada *Macurabon Taiqeqiqi* publicada por volta do ano de 1720. Suzuqi Farunobu, o qual recebeu uma inspiração da presente obra de Suqenobu e reproduziu-a numa colectânea da sua autoria. Aí um homem com a máscara do diabo – «Tengu» – conversa com o casal dos lavradores trabalhando no arrozal e promete uma boa fortuna se lhe ofereça a filha dele, brincando com vários engraçados jogos de palavras..... O camponês, acreditando nas suas palavras enganadoras, diz agradecido: “Se me garantirdes uma boa colheita, dedicar-vos-ei não só a filha («Muçume») mas também a esposa anciã («Babame»).

A ética sexual católica só aprova os actos sexuais levados a cabo pelo casal legítimo, reconhecendo-os como um «mal necessário» a ser perdoado sob a única condição de visar a procriação. Perante tal moral, parece-nos naturalíssimo terem sido provocados desvairados «desencontros» entre os mestres europeus e vários catecúmenos japoneses pertencentes à camada plebeia – maiormente lavradores, segundo presumimos – já então sob a severa perseguição. Quanto ao conceito para com o sexto mandamento, de qualquer maneira, não poderíamos deixar de dizer que sempre predominava um ambiente conflictuoso entre ambas as partes, um fenómeno semelhante ao da mistura da água com o óleo, de acordo com um dito comum nipónico.

BIBLIOGRAFIA

- ABE, Kin'ya. *Seiyō Chūsei no Otokoto Onna: Seisei no Jubaku no nakade*, Tóquio, Chikuma Shobō, 1991 (阿部謹也『西洋中世の男と女——聖性の呪縛の中で』筑摩書房, 1991年).
- AKAMATSU, Keisuke. *Yobai no Seiai-ron*, Tóquio, Akashi Shoten, 1994 (赤松啓介『夜這いの性愛論』明石書店, 1994年).
- CARLETTI, Francesco. *Ragionamenti di Francesco Carletti Fiorentino sopra le cose da lui vedute ne' suoi Viaggi si dell' Indie Occidentali, e Orientali come d' altri Paesi*, Firenze nel Garbo, 1701.
- Cathecismo Pequeno de D. Diogo Ortiz Bispo de Viseu (O)*, ed. Elsa Maria Branco da Silva, Coleção Obras Clássicas da Literatura Portuguesa 115, Lisboa, Edições Colibri, 2001.
- COLLADO, Fr. Diego. *Dictionarium sive Thesauri Linguae Iaponicæ Compendium Compositum, & Sacræ de Propaganda Fide Congregationi dicatum à Fratres Didaco Collado Ord. Prædicatorum*, Romæ, Anno 1632.
- COLLADO, Fr. Diego. *NIFFON NO COTOBANI YÔ CONFESION, Vo mōsu yōdai to mata Confesor yori goxensacu mesaruru tame no canionaru giō giō no coto*. Danguixa no monpa no Fr. Diego Collado to yū xucqe Roma ni voite core vo xitate mono nari. 1632. *MODVS CONFITENDI ET EXAMINANDI Pœnitentem Iaponensem, formula suamet lingua Iaponica*. Auctore Fr. Didaco Collado Ord. Præd. Romæ à die 20. Iunij, anni 1632.
- FROIS, Luís, S. J. *Kulturgegensätze Europa-Japan (1585). Tratado em que se contem muito susinta e abreviadamente algumas contradições e diferenças de costumes antre a gente de Europa e esta provincia de Japão*, ed. Josef Franz Shütte S. J., Tōkyō, Sophia Universitât, 1955 (Tradução integral japonesa ricamente anotada: Luís Fróis, *Yōroppa-bunka to Nihon-bunka*, tra. Okada Akio, Tóquio, Iwanami Bunko, 1991 [ハリス・フロイス『ヨーロッパ文化と日本文化』岡田章雄訳注, 岩波文庫, 1991年]).
- FRÓIS, Luís. *Historia de Japam*, IV, ed. José Wicki, Lisboa, Biblioteca Nacional de Lisboa, 1983 (Tradução integral japonesa ricamente anotada: Fróis *Nihon-shi, I, Toyotomi Hideyoshi-hen*, tra. Matsuda Kiichi & Kawasaki Momota, Tóquio, Chūō Kōronsha, 1977 [『フロイス 日本史 1 豊臣秀吉篇 I』松田毅一/川崎桃太訳, 中央公論社, 1977年]).
- GUY BECHTEL. *A Carne, o Diabo e o Confessor*, tra. Magda Bigotte de Figueiredo, Lisboa,

Publicações Dom Quixote, 1998.

Hagakure, III, ed. Watsuji Tetsurō & Furukawa Tetsushi, Tóquio, Iwanami Bunko, 1941 (『葉隠』下, 和辻哲郎/古川哲史編, 岩波文庫, 1941 年).

KUDAMATSU, Kazunori. *Ōmura-shi: Kotonoumi no Jitsugetsu*, Tóquio, Kokusho Kankōkai, 1989 (久田松和則『大村史——琴湖の日月』国書刊行会, 1989 年).

Nan'ō Shozai Kirishitan Shūroku: SALVATOR MVNDI, ed. Ebisawa Arimichi, Tóquio, Yūshōdō Shoten, 1978 (『南欧所在 吉利支丹集録 サルバトール・ムンヂ』海老沢有道解説, 雄松堂書店, 1978 年). Aqui se contém o facsímile do raríssimo exemplar da obra *SALVATOR MVNDI* publicada pela Companhia de Jesus no Japão no ano de 1598 e conservada hoje na Biblioteca Casanatense, Roma.

ŌTSUKA, Mitsunobu. *Collado Sangeroku Shichū*, Quioto, Rinsen Shoten, 1985 (大塚光信『コリヤード さんげろく私注』臨川書店, 1985 年). Aqui se contém o facsímile da primeira edição da obra *MODVS CONFITENDI ET EXAMINANDI* pertencente ao próprio autor.

SANO, Kenji. “Jūsan Nanatsu” in *Yagai Bunka*, Tóquio, Shadanhōjin Seishōnen Kōyū Kyōkai, núm. 165, 20 de Abril de 2000 (佐野賢治「十三七つ」『野外文化』社団法人青少年交友協会, 165 号, 2000 年 4 月 20 日).

SHIRAKURA, Yoshihiko. *Shunga de yomu Edo no irokoi: Ai no mutsugoto «Shijūhatte» no sekai*, Tóquio, Yōsensha, 2003 (白倉敬彦『春画で読む江戸の色恋——愛の睦言「四十八手」の世界』洋泉社, 2003 年).

UJIE, Mikito. *Fughi Mittsū: Kinjirareta Koi no Edo*, Tóquio, Kōdansha Sensho Metier, 1996 (氏家幹人『不義密通——禁じられた恋の江戸』講談社選書メチエ, 1996 年).

Vocabulário da Lingoa de Iapam com a declaração em Portugues, feito por alguns padres, e irmãos da Companhia de IESV. Com licença do Ordinário, e Superiores em Nangasaqui no Collegio de Iapam da Companhia de IESVS. Anno M.D.CIII. *Supplemento deste Vocabulário impresso no mesmo Collegio da Cōpanhia de JESV*. Com a sobredita licença, & aprovação. Anno 1604 (Utilizámos a obra intitulada *Évora-bon Nippo Jisho*, ed. Ōtsuka Mitsunobu, Ōsaka, Seibundō Shuppan, 1998 [『エヴォラ本 日葡辞書』大塚光信解説, 清文堂出版, 1998 年]). Aqui se contém o facsímile do exemplar conservado na Biblioteca Pública de Évora).

WATANABE, Shin'ichirō. *Edo Bareku Koi no Ironaoshi*, Tóquio, Shūeisha Shinsho, 2000 (渡辺

信一郎『江戸バレ句 恋の色直し』集英社新書, 2000 年).

WATANABE, Shin'ichirō. *Edo no Otoire*, Tóquio, Shinchō Sensho, 2002 (渡辺信一郎『江戸のおトイレ』新潮選書, 2002 年).